アキタブキ

Petasites japonicus var.giganteus

キク科

名前の由来
山で白い毛をつけた果実が吹き散る様を山吹雪にたとえ、それが詰まってフキとなったという説がある。また茎の中に孔があり、折ると糸があることを古くはフブキと言い、それがつまったという説、汚れを拭くのに葉を用いたことから由来するという説もある。漢字名：秋田蕗

アキタブキの雄花。円内は葉

形態的特徴

大型で高さ1～2mになる。根茎から花茎と葉柄を別々に出す。葉は巨大で腎円形、縁にあらい鋸歯を持ち、柄は長く中空。雌雄異株で、雌株は高いトウを立てる。茎の頂に花を多数、球状につける。大群落になる場合が多い。フキの花茎（特につぼみの時）をフキノトウという。

類似種：特になし。

アキタブキ。雄花

アキタブキ。雌花

アキタブキ。高く伸び、種子をつけた雌花

アキタブキ。種子のアップ

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期												
結実期												

生育環境・分布

低地から山地の沢の中や河川敷、道端など生育する。

分布：国外分布は温帯に分布し、千島・樺太。シベリア東部からは報告されていない。

国内分布は、本州（低地では岩手県水沢以北、高地ではもっと南下する）と、北海道。

北海道内分布は、全道。日当たりのよい山地～平地の草原や湿原で見られる。

十勝地方では、低地から山地の沢の中や河川敷、道端などに普通に見られる。堤防などの日当たりのよいところにも、河畔林内などのやや薄暗いところにも群生する。しばしば大きな群落をつくる。

アキタブキ。群生している様子

生活史

開花時期：4～5月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

クマが茎を好んで食べる。冬眠から覚めたクマが真っ先に食べるのはフキノトウだと言われている。

アキタブキ。食べごろのフキノトウ

アキタブキ。開花直前のつぼみ

アキタブキ。開花した雄花

興味深い話

■フキノトウはフキの花茎であり、芽だし直後の花が開く前のものが山菜として食されている。また葉柄も食べられる。アクぬきし過ぎないようにして、油いため、煮ものなどにしておいしく食べられる。またフキノトウは生のままてんぷらにしてもおいしい。

■昔から薬用にも用いられ、煎じて飲むとせき止めやたん切り、解熱などに効果があるとされる。また、特有のほろ苦さは食欲増進作用もあるとされる。採取時には同じ場所から取りすぎないようにしたい。

■足寄町に生育しているアキタブキは大型であることから特に有名で、産地名をとってラワンブキと呼ばれている。

■アイヌの伝説に登場する先住民族のコロポクウンクル（コロポックル）は「フキの葉の下にいる人」という意味。

■十勝地方などのアイヌ語で、フキは「コルコニ」、フキノトウは「マカヨ」という。

■アイヌ語名コルコニは「フキの葉・もつ・木」の意。フキの葉はコルコニハムという。

■アイヌのフチ（お婆さん）によると、フキは食べるほかに「ヘビにかまれた時やハチに刺された時に茎をかじってつけ、ウルシにかぶれた時に葉を火にあぶったものを貼り、また葉は腫れ物や傷の手当てに用いた。根も熱冷ましに用いた」という。

アキタブキ。開花後にのびた葉

参考文献

「北海道植物図譜」滝田謙譲　自費出版　2001

「日本の野生植物　草本Ⅲ」佐竹義輔・大井次三郎　他　平凡社　1981

「アイヌ植物誌」福岡イト子　草風館　1995

「北海道薬草図鑑　野生編」山岸喬　北海道新聞社　1992

「森林で遊ぼうシリーズ3　おもしろい草花の話」北海道立林業試験場　北海道林業改良普及協会　1998

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会　2004